にほんでいきる　外国からきた子どもたち

毎日新聞取材班編（明石書店・1760円）

毎日新聞
2021.2.27

就学年齢になったのに、学校に通っていない子ども。そんな子どもを見たら、周囲の大人はなんとかして教育を受けさせようとするはずだ。しかし、「就学状況不明の児童」が少なくとも1万6000人いるにもかかわらず、目立った支援策もなく放置されてきたグループがある。外国人労働者の子どもたちである。

日本で働く外国人労働者はただでさえ不安定な立場だ。「あえて不慣れな外国で働くのだから、リスクは自己責任」と思われている。しかし、その理屈を小さな子どもにもあてはめてよいのだろうか。そんな視点から継続的に書かれた新聞記事が、一冊の本になった。子どもの暮らしをていねいに追い、日本の学校に通っていても日本語がわからず授業についていけないケースなども取り上げている。学校でも地域社会でも人間関係が築けず犯罪に走った人にも話を聞いている。

日本で生まれ育つ人にとっては日本が「ふるさと」であるべきだ。日本の教育を受け、日本の人間関係のなかでふるさとを支える力を身につけてくれれば、すべての人にとって損はない。「見なかったふり」は、なにも生まない。

（渡邊十絲子・詩人）